



いれずみ物語

— 10 —

小野 友道

ニコラス皇太子のいれずみ — 両腕に龍の彫り物 —

明治24年（1891）4月、露国皇太子ニコラスと従兄のギリシャのジョージ親王殿下が国賓として来遊した。艦隊は長崎港へ4月27日に入港した。5月4日初めて公式上陸し、翌日には鹿兒島湾へと向かい、神戸に至り、それから陸路をとった。長崎港停泊中に、実はニコラス皇太子がいれずみを入れたという話がある。出久根達郎の『かわうその祭』に映画「湖南小満」のシナリオの話が出てくる。ちなみに「大津事件」は「湖南事件」ともいわれている。「<映画ではロシアとははっきり謳っていませんね。某国の皇太子、とぼかしています>五郎が言った。<そうか。長崎に上陸した某国の皇太子が、稲佐楼のみよと出会うんだね>深草がまぶたを指先で揉みながら、五郎を見た。<確かニコライもお忍びで歓楽街に行っている><映画では刺青を施す場面があります><刺青も事実のはずだよ>深草が言った。……<何年前、必要があって新聞の縮刷り版を調べたことがある。東京朝日新聞に長崎発として、その記事が出ていた。日本の刺青に興味を持っていたらしい。図柄は龍だったかな…>」この話、これからがだんだん面白く展開していくのであるが、それは『かわうその祭』を読んでのお楽しみ。

それ以前に、この皇太子のいれずみ話に興味を持ったのが飯沢 匡である。長崎へ調査に出かけ、当時の密偵から宮内大臣への公文書を探し当て、その中に件のいれずみの記事を発見した。飯沢は「私は思わず大きな声で<あった！>と叫んでしまった」と述懐している。「長崎市摂津町、野村幸三郎、大黒町姓不詳、又三郎ノ両名ハ連日、皇太子殿下御乗船ニ御召入ラレ殿下ハ両腕ニ龍ノ刺文ヲ施サレ希親王殿下及士官数名モ各右両人ニ托シ刺文セラレ皇太子殿下ヨリハ貳拾五円、希親王殿下ヨリハ壹円ヲ下賜セラレ其他士官二名ヨリハ八円ヲ与ヘタル由」と記されていたのである。飯沢は「ロシアの皇太子とギリシャ国王子の二人が二十歳そこそこの若気の至りで極東のお伽噺のような国、日本に行つて、そこの記念に東洋の伝説上の化物の一種たるドラゴンを両腕に彫ってみようということになったのであろう」と結論した。

*

ニコラス皇太子は例の大津事件で有名である。5月11日、皇太子らは威仁親王の案内で志賀県へ観光旅行をし、事件に遭遇した。当時の大審院長兒島惟謙の『大津事件日誌』の冒頭に「湖南事件の真髓」として「明治廿四年五月十

一日、巡查津田三蔵、その佩剣を抜いて露国皇太子を大津町に要撃し、頭部に二個の切創を負わし奉る。越えて同月廿七日、大審院は、謀殺未遂犯を以て、三蔵を無期徒刑に処せり」とある。この事件は日本を震撼させた。日誌に「当時、露国は世界の大国なり。而して被害者は、当時の大露西亜帝国皇帝の嫡出の皇太子にして、将来の全露西亜のザールなり。而して加害者は、国家の秩序安寧を保護する公職に当れる警察官なりき。されば外交の問題に於て、政府は実に今や噴火口頭に立つものして戦慄せると同時に、国家三千年の生命は、此に至りて或は断滅の悲運に遭遇するものとして悲しめり」と事の重大さが伝わる。この事件の加害者三蔵の取り扱いについては、児島の日誌には、三蔵が死刑ではなく、無期徒刑になった経過が述べられ、水面下での司法の苦勞が綴られている。この日誌は穂積陳重が世に出したが、日誌以外に穂積自身の文章などいくつかも加えられ、その中に「穂積歌子日記(抄)」もある。「明治二十四年、四月二日(水)此頃、西郷隆盛は未だ生存し居り、露国皇太子の軍艦に乗り込み来りしよし、専ら風説す」とある。実はこの風説が三蔵の決意と関係したとの話がある。ロシアに逃れた西郷が生還し、逆襲があるとの噂である。

出久根の前出の『湖南小満』にも「普通は東京、京都、奈良、この辺を回って帰国する。それがどうだ、かの国の皇太子は、鹿児島に行きたいとの希望だ」「すると、噂は本当なんですか?」「西南の役で死んだはずの西郷隆盛が生きていて、皇太子と一緒に帰るというのだから? まさか、それはありえないよ」「近頃、異様に赤く輝く星が出て、皆…」「西郷星だと騒いでおります」といった会話が出てくる。

被告三蔵は西南の役で西郷隆盛軍と戦い勲七等を授与されており、これら噂に胸のうち納まらず、大津の三井寺境内西南戦役記念碑の前で、西南戦争を追懐しながら、太子殺害を決意したようである。1週間の長崎停泊をみれば、飯沢の言う通り、それは案外いれずみが主たる目的だったのかもしれない。しかし、それでも

鹿児島へ立ち寄った理由は定かでない。

いずれにせよ、なぜ長崎でいれずみか。長崎はロシアと縁が深い。万延元年(1860)ピリレフ提督に率いられた軍艦ボスザニク号がやって来た。稲佐の遊女が将校たちの相手をさせられたが、提督は彼女たちの黴毒の検査を要求した。「ロシア女郎衆の陰門解放」と呼ばれる屈辱的なものであった。ポンペが指導に当たったが、これが日本における検閲制度の始まりとなったのは皮肉である。それ以来、稲佐はロシアにとってなじみの場所である。そこには日露混血の通訳もあり、「ヴォルガ亭」というロシア人専用の料亭などもあって、オロシア租界を形成していた。熊本天草出身でヴォルガ亭などで働き、ロシアへ渡り9年間滞在、22歳の時に浦上淵村(現長崎市旭町)の高台にホテル「ヴェスナ」を建て、後に「オロシアお栄」と呼ばれた天草出身の女傑がいた。お栄のホテルの客層はロシア海軍士官に限られ、「ロシア海軍の母」と呼ばれるようになった。

明治24年にニコラス皇太子がお忍びで上陸した際にも、お栄が宴の采配をふるった。お栄はロシア語が堪能であった。「五月三日午後九時四十分、皇太子とジョージ親王は、士官八名をともなって短艇から志賀の波止に上陸した。…お栄が単身で出迎え、波止のすぐ前にある福田甚八の別邸のロシア将校休息所に案内した。…酒宴がはじまり…別室に入ったお栄は、和服から裾の長い洋服に着替えて出てきた。…夜もふけ、諸岡マツの先導で料亭ヴォルガに移り、玉突き(ビリヤード)に興じ、皇太子と親王は、マツのはからいで二階にあがった。皇太子はお栄と、親王は芸妓の菊奴とそれぞれ寝室に入った」と吉村 昭の『ニコラス遭難』にある。

シーボルトの娘おいね、坂本龍馬ら勤王の志士を助けた大浦のお慶とならび、お栄は「長崎の三大女傑」として名高い。

*

いれずみを所望した外国人は露国皇太子だけではなかった。明治政府は文明国・一等国にならねばならない焦燥感もあり、いれずみ禁止、



長崎滞在中のロシア皇太子ニコラス 『異史 明治天皇伝』より転載。

はたまた、立ち小便禁止など外国への体面にこだわった。皮肉なことに来日外国人に日本のいれずみは魅力的で、いわゆるジャポニズム趣味から彫るのを希望する者が後を絶たないという現象が生じたのである。当時、政府は日本人へのいれずみは禁止したものの、横浜港など外国人居留地での彫物師の営業は黙認した。長崎もその一つである。明治14年には彫千代という名人が、英国王室のアルバート王子とジョージ王子にいれずみをした。この彫千代が実は長崎まで出向いてニコラス皇太子のいれずみを彫ったという話があるが、飯沢の見た公文書ではそうでなかった。また名人彫字之も大使館などに雇われている日本人馬丁に彫たいれずみが縁で、外国人にも彫るようになり、ついには帝国ホテルなどのボーイを通じても客が希望したという。明治39年英国の皇弟アーサー・オブ・コンノートに日光まで出かけて不動明王を彫ったことで有名である。ともかく、その頃のロシアは欧化が急激で、日本のいれずみについての知識、憧れはニコラス皇太子にかなりあったと考えられる。

*

ところで、ニコラス皇太子の天津事件で負った切創を縫ったのは誰か。政府は当時、これしかないという外科医師ユリウス・カルル・ス

クリバを天津に派遣した。彼は明治14年、ドイツから東大へ外国人教師として赴任していた。しかし、当時ロシアとドイツは不仲であり、皇太子側はこの名医を歓迎しなかった。「一切拒絶する」と無碍に断られ、ロシア艦隊のスミールノフと軍医ダウニオンにより縫合などの治療がなされた。幸い切創は順調に快癒し、熱も出ず、皇太子一行は東京へは寄らないまま神戸より帰還した。

ともかくニコラス皇太子は、日本でいれずみの針とサーベルにより、2度も痛い目に遭った。その後ニコラスはニコライⅡ世として帝政ロシア最後の皇帝に就いたが、日露戦争で日本に3度目の痛い目に遇わされた。さらに革命で退位やむなく、ついにはシベリアで家族とともに銃殺された。

(熊本保健科学大学・副学長)

主要文献

- 1) 荒俣 宏：『開化異国助っ人奮戦記』、小学館、1993。
- 2) 飯沢 匡：『異史 明治天皇伝』、新潮社、1988。
- 3) 刈谷春郎：『江戸の性病』、三一書房、1993。
- 4) 熊本日日新聞：大矢野町出身「オロシアおエイ」、2000. 6.25 朝刊。
- 5) 児島惟謙（家永三郎編注）：『東洋文庫 187 天津事件日誌』、平凡社、1971。
- 6) 玉林晴朗：『文身百姿』、文川堂、1936。
- 7) 出久根達郎：『かわうその祭』、朝日新聞社、2005。
- 8) 長門谷洋治：日本皮膚科学会と土肥慶蔵、日皮会誌、111；609、2001。
- 9) 吉村 昭：『ニコラス遭難』、岩波書店、1993。